



施設だより

ひこね市文化プラザ ☎26-8601 FAX 26-8602
4月の休館日：5月、12月、19月、26月

★★★ 注目のイベント ★★★

4月25日(日) 15:00~ ミュージカル ラスト・ファイヴ・イヤーズ

演出：鈴木勝秀
出演：山本耕史、村川絵梨
◎数々のミュージカルに出演し、高い評価を得ている山本耕史と、テレビ、映画で活躍する村川絵梨が、その歌声と見事なダンスシーンを披露します。



指定 S席6,800円、A席6,000円
※未就学児の入場はできません。

5月3日(月祝) 15:00~ 宮川彬良& アンサンブル・ベガ

◎NHK番組「クインテット」でお馴染みのアキラさんが、番組で演奏を担当するアンサンブル・ベガとともにやってきました。

指定 一般4,000円
学生3,000円(限定30席・座席エリア指定)
※未就学児の入場はできません。



チケット購入者対象
楽器体験！
「音の動物園」開園！
時間：13:30~
場所：エコーホールロビー
触れてみたかった楽器を学んでさわって体験するコーナーです。ぜひご参加ください！

ひこね市民大学講座2010歴史手習塾

詳しい内容は、広報ひこね2月15日号10ページをご覧ください。

セミナー1 新しい江戸イメージ！
4月9日(金)、16日(金)、23日(金) 18:30~

セミナー2 戦国彦根の城郭講座
5月12日(水)、19日(水)、26日(水) 19:00~
6月6日(日) 10:00~ 山崎山城フィールドワーク

セミナー3 NHK大河ドラマから見た歴史
7月6日(火)、16日(金)、23日(金) 18:30~

4月 4月27日(火) 19:00~ 金亀亭第6回落語ライブ
指定 立川談春独演会

5月 5月21日(金) 19:00~
指定 岡安芳明カルテット ミーツ 小林桂

6月 6月12日(土) 18:30~ 劇団四季ミュージカル
指定 ソング&ダンス55ステップス

以降 6月26日(土) 12:30/15:00 <2回公演>
指定 <こどもちゃれんじ>コンサート
しまじろう みんなでたんけん！みなみのしま

チケットのお申し込み、お問い合わせは
チケットセンター ☎27-5200 (9:00~19:00)
インターネットでも購入いただけます。http://bunpla.jp/

彦根城博物館

☎22-6100 FAX 22-6520
4月の休館はありません。
※4月13日(火)~同15日(木)は展示替えのため、展示室を一部閉室しています。

開館時間 8:30~17:00 (入館は16:30まで)

4月13日(火)まで

「井伊家伝来・能の小道具」

普段はあまり注目されることのない能の小道具。井伊家15代直定が自ら収集した多様な小道具の数々を紹介します。

4月16日(金)~5月18日(火)

「国宝・彦根屏風」

近世初期風俗画の傑作、国宝・彦根屏風を特別公開します。



▲国宝・彦根屏風

ギャラリートーク 「国宝・彦根屏風」

4月17日(土) 14:00~15:00

解説：本館学芸員 高木 文恵
※事前申し込みは不要です。当日、館内講堂にお集まりください。

観覧料が必要です

ほんものとの出会い

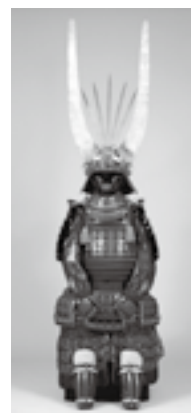
— 常設展示の名品 —

常設展示「ほんもの」との出会いでは、譜代大名筆頭・井伊家に伝来した名宝を中心に80点あまりを展示しています。

4月13日(火)まで

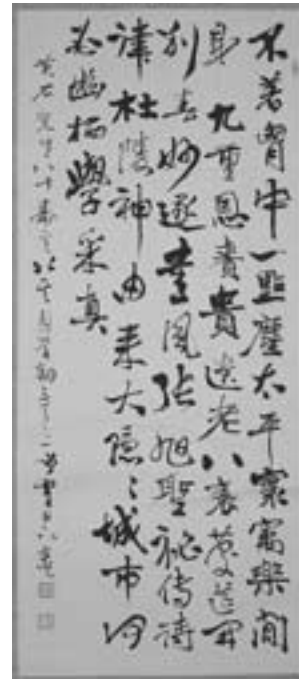
朱漆塗紺糸威縫延 腰取二枚胴具足

井伊家8代直定が所用したと伝える具足。歴代の具足のうち最も豪華で華やかな1領。



常設展示の名品

▶祝岡本黄石八十寿詩(3幅のうち1幅)



日下部鳴鶴は、彦根藩士出身の書家です。明治維新後は新政府に就いて大書記官にまでなりましたが、42歳の時に書の道一筋に生きていくことを決意しました。鳴鶴は、中国の楊守敬の来日あたり、書道および金石学(金属や石などに刻された文字、文章を研究する学問)を本格的に学び、中国に渡航して当地の書家や文化人と熱心に交流することで学識を広げ、

近世書道界に大きな足跡をのこしました。一方、岡本黄石は、幕末・維新期の彦根藩の家老として、藩主井伊直弼が暗殺された桜田事変後の藩の混乱をとりまとめた人物として知られています。若い時から漢詩を得意とし、詩壇の中心的存在であった梁川星巖にその才を認められていました。維新後は政治から完全に離れ、隠居して詩を詠むことに専念し、多くの門人を抱えました。鳴鶴はその門人の1人ですが、同郷ということもあり、師弟関係を越えた密接な交わりがありました。

2人の関係について知り得た早い記録は、慶応4年(1868)3月の記事です。明治新政府は、諸藩に代議員

黄石の80歳の寿宴は、明治23年5月11日、隅田川河畔の八百松楼において、約300名もの人が招かれて盛大に執り行われました。参加者は、三条美美、榎本武揚、清国公使黎庶昌など、錚々たるメンバーです。当時の招待状を見ると、幹事7名、補助として36名の名が連ねられ

写真の「祝岡本黄石八十寿詩」は、常設展示「ほんものとの出会い」で、4月14日(水)~5月17日(月)に展示します。(期間中無休)

である貢士を選任させましたが、彦根藩からは、黄石が推挙を受けました。しかし黄石は、故あって辞任を願い出て、その後任に鳴鶴が推挙されたというものです。黄石は、芹川の近くの「芹水荘」に隠居した後、明治4年(1871)に彦根を離れて京都の華頂山中に居を構えます。この地で漢詩の結社を開き、京都と東京を頻りに往来して門人の育成にあたり、同時に、全国を遊歴して漢詩を吟じました。明治8年には東京の鳴鶴邸に身を寄せて10か月程滞在中、鳴鶴の書齋で漢詩会を開くなどしています。明治13年には東京に家を借り、以後、近い範囲で住居を転々としながら詩会を開いており、鳴鶴は、その多くに参会しました。

この漢詩の一言一句は、古くから黄石と知己の間柄にあった鳴鶴の心の内より敬意を込めて発せられたものでしょう。鳴鶴の作品は世に多く遺されていますが、その中で本書は、筆致が力強く、内面から湧き出る崇高な意識が感じられるのです。(彦根城博物館学芸員 高木文恵)

彦根出身の日下部鳴鶴と岡本黄石

とまきの玉手箱

博物館からのメッセージ



第164回